高校生の「自我同一性の感覚」について

須藤博子（福島大学大学院教育学研究科）
青木真理（教育実践総合センター・教育臨床学）

本論では，谷[1]の開発した多次元自我同一性尺度により，一般高校生と相談室利用者の「自我同一性の感覚」を調査・比較し，「自我同一性の感覚」の程度が高校生の対人関係の悩みとどのように関連し，対人関係に焦点をあてた援助プランを立てる上で有効な情報となるのか検討する。高校1，2年生（一般高校生）876名と様々な理由で相談室を利用している高校生（相談室利用者）19名を対象に，多次元自我同一性尺度による調査を行い，得点化して，「自我同一性の感覚」を検討した。谷の大学生の調査結果では，年齢が上がるに連れて尺度の得点が高くなり，「自我同一性の感覚」が発達的に変化する結果が得られているが，高校生では年齢による発達的変化はあまり顕著ではない。下位尺度間で比較すると対他的同一性や心理社会的同一性の二因子の得点が低く，男女間では女子の方が得点が低いが，男子に比べ年齢的変化が見られる。相談室利用者の「自我同一性の感覚」は一般高校生のそれに比べ，かなり未熟で，下位尺度間の比較では対他的同一性と心理社会的同一性の得点が極端に低い値を示した。さらに，相談室利用者の個人の調査結果はその生徒の問題を反映している。

〔キーワード〕　自我同一性の感覚，対人関係援助，高校生，援助プラン，多次元自我同一性尺度，発達課題

1．はじめに

平成13年度の高等学校の中途退学者数は104,894人（前年度より3.9%減）である。さらに原級留置者数は25,627人である。中退事由については「学校生活・学業不適応」が38.1%で最も多く，次いで「進路変更」36.3%，「学業不振」6.4%である。「学校生活・学業不適応」の内訳は，「もともと高校生活に熱意がない」が41.2%を占めている。「進路変更」の内訳は「就職を希望」が50.9%を占め，「別の高校への入学希望」が23.3%などとなっている。中退率を学年別にみると，第1学年での中退率が4.2%で最も高く，以下第2学年2.5%，第3学年0.8%で，中退者全体のうち，1年生が占める割合が52.9%，2年生が31.3%，3年生が9.4%である[2]。社会的ひきこもりが100万人ともいわれる状況にあって，高校生の中途退学者の問題は深刻に受止めていかなければならない問題であると考える。しかし，文部科学省は高校中途退学者の問題の対策として，中学校における進路指導や高校におけるガイダンス機能の充実などを揚げているが，小・中学校の不登校対策のような具体的な施策はなく，今後，青年期の発達課題を十分考慮した対応が望まれるところである。

平成12年度の総務庁の調査[3]によると，小学生のうち55%が個室を，14%がテレビ，3%が携帯電話・PHSを所有し，子供達の「生活の孤化」ともいうべき傾向が見られると報告している。家庭におけるパーソナル化は，知らず知らずのうちに家族の団欒や摩擦の機会を奪い，家族という共同体を個人の集合体へと変化させている。加えて，少子化，単身赴任などにより家族形態も変化し，家族機能が低下していることも否めない。また，子どもの体験活動研究会が行った子どもの喧嘩体験の調査結果では，20年前と比べて，子供達が自分の感情のコントロールができない傾向にあり，人間関係の結び方が未熟であると報告している。

早坂[4]も現代社会に生きる人々の対人関係の希薄化，孤立化の問題をとりあげているが，その中でテレビゲーム，パソコン，ビデオ，ウオークマンなどの「一人遊びの道具」の普及により，自閉的世界に生きる傾向に拍車をかけていると述べている。そして，このような自閉的な世界に没入する青少年の心の発達上の諸問題に対し，信頼できる他者との出会いや，家族，友人，先生などとの対人関係の回復が必要であるとし，対人関係を通じて「自分を知る」「自分がわかる」ことが重要であるとしている。

カイリー[5]によると，「ピーター・パンシンドローム」は10代後半から20代にかけて勝手気ままに生きてきた男たちにみられる症状であるし，その心理的状態は子どもから大人になるまでの長い時間の経過の中で起こった変化であると述べている。彼らは発達課題を解決しないまま成長し，思春期に入って仲間からの拒否に会い，現実逃避していった青年達である。このようなピーター・パンシンドロームが話題になって久しいが，いずれにしろ，自閉的な世界に浸ろうとする子供たちにとって，精神的発達期に十分な対人関係を体験していないことが社会不適応につながっている。

エリクソン[6]は人間の発達段階を8つに区分したう

えで，それぞれの段階における発達課題に関連し，自我は最初の課題を乗り越えなければ次の課題に取り組むことができないと述べている。エリクソン[6]は自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達しつつあるという確信を自我同一性であるとし，青年期の発達課題は急速な身体的成長と性的成熟がもたらす，自分についての自他のイメージや認識の動揺を克服して，自我同一性の感覚を得ることができるかということであると述べている。つまり，青年期においては，大人になるために生まれた時から馴染んできた価値観を他者との関わりの中で見直し，親との関係を意識の上で捉え直し，自分らしさを確立することが求められる。しかし，現代青年にとっては，青年期以前の発達課題の克服そのものが難しくなっている。児童期までの発達課題は，親・家族とのきずなを基盤として同輩との関係を広げていくことのうえになしとげられるわけであるが，先に述べた文部科学白書のデータ[2]に見られるように，現代社会の中で，子供達はしらずしらず自閉的な遊びに没入し，対人関係の結び方も不十分なまま，成長している。このように青年期以前の発達課題が十分解決されないまま青年期に達した青年達は高校受験というハードルを越えて高校入学を果たしたものの，生活環境の拡大・変化と同時に自己のあり方が否応なく問われ，自我が混乱をきたす場合が少なくない。

筆者（須藤）は私立高等学校の常勤カウンセラーとして，生徒の相談室への受け入れから教室への再適応までの過程を，対人関係に焦点をあてて援助している[7,8]。青年期以前における親子関係や同輩関係などの発達課題をみなおし，教室のヒエラルキーが持ち込まれない安全な社会的環境において自我の育ち直しを援助することは，対人関係を取り戻すことを促し，教室再適応を容易にすると思われる。エリクソン[6]は，青年は仲間によって肯定されることを切望するといい，吉田[9]は思春期臨床において対人関係を取り戻すことの重要性について述べている。筆者自身も，対人関係の悩みを抱えた生徒に対しては，新たな仲間作りを援助する方が早期の自立につながることを経験している[7,8]。そのために，それぞれの生徒の自我同一性の感覚がどの程度成熟しているのか把握し，生徒にあった発達課題への向き合い方を援助することは重要であると考える。

以上のことを踏まえ，本論では，谷[1]の開発した青年期のための多次元自我同一性尺度により，一般高校生と相談室利用者の「自我同一性の感覚」を調査・比較し，自我同一性の感覚の程度が高校生の対人関係の悩みとどのように関連し，対人関係に焦点をあてた援助プランを立てる上で有効な情報となるのかを検討する。

2．研究方法

谷[1]がエリクソン理論に基づいて青年期における「自我同一性の感覚」を測定するために開発した多次元自我同一性尺度を用いて，相談室を利用している生徒19名（相談室利用者）と1，2年生男女877名（一般高校生）を対象に「自我同一性の感覚」を調査した。相談室利用者の場合は2001年から2002年にかけて来室時に随時調査に協力してもらい，一般高校生の場合は2002年11月に一斉に実施した。表1は被験者の内訳である。男女共学であるが，学校全体として女子の割合が少ない高校なので，男子より女子の被験者の数が少ない。

表1．被験者の内訳（人数）

	男　子	女　子	合　計
1年生	328	141	469
2年生	323	84	407
相談室利用者	7	12	19

表2には相談室利用者について相談室を利用する時の利用の仕方をタイプ別[8]に分けて示した。長期間の利用の長期滞在型が約半数である。残りは不定期避難型と休憩時間型が半々である。

表2．相談室利用者のタイプ別内訳（人数）

相談室利用のタイプ	人　数
長期滞在型	8
不定期避難型	5
休憩時間型	6
合　計	19

多次元自我同一性尺度は第1因子（自己斉一性・連続性），第2因子（対自的同一性），第3因子（対他的同一性），第4因子（心理社会的同一性）の4つの下位尺度から構成されている。自己斉一性・連続性とは自分が自分であるという一貫性や時間的連続性を持っているという感覚，対自的同一性は自分自身が目指すべきもの，望んでいるものなどが明確に意識されている感覚，対他的同一性は他者から見られているであろう自分自身が，本来の自分自身と一致しているという感覚，心理社会的同一性は現実の社会の中で自分自身を意味付けられる感覚である。回答者は無記名で，学年・年齢・性別の記入を求め，20項目のそれぞれについて“全くあてはまらない”から“非常にあてはまる”の7段階で評定することを求められる。（資料参照）

相談室利用者については，多次元自我同一性尺度の調査結果と相談内容との関連を見るために事例の検討も行う。なお，事例の提示にあたっては秘密保持のため，本質を損ねない程度に修正を加えた。

3．結果

各項目の得点（1～7点）は，得点が高いほど「自我同一性の感覚」が高いことを示す。

1）一般高校生の自我同一性の感覚

表３に示したように一般高校生の多次元自我同一性尺度の年齢別得点平均値は，16歳と17歳では４つの下位尺度および総得点いずれも得点平均値にほとんど差がなく，どちらかというと16歳より17歳の方がやや得点が低い。対他的同一性や心理社会的同一性は他の下位尺度より低く，さらに15歳の得点平均値と比べ，明らかに16・17歳で高い値を示している。また，自己斉一性・連続性と対自的同一性の感覚は発達的変化を示さない。なお，今回の調査で16歳の生徒の被験者数が15歳，17歳より多いのは，16歳の年齢の生徒が1，2年の両学年にわたるためである。

表４には多次元自我同一性尺度の男女別得点平均値を示した。対他的同一性以外の下位尺度の得点および総得点が男子より女子の方が低い値を示している。さらに，図１，２には一般高校生の男女別の多次元自我同一性尺度の発達的変化を示した。男子では各下位尺度の得点に発達的変化はみられないが，女子では15歳から17歳へと年齢が増すにつれていずれの下位尺度でも得点が増加する傾向が見られる。また，男女ともに自己斉一性・連続性の尺度の得点は他の下位尺度の得点よりも高い値を示している。

2）相談室利用者の自我同一性の感覚

一般高校生と相談室利用者の多次元自我同一性尺度の得点平均値を表5と図３に示した。相談室利用者の被験者数が，対照となる一般高校生の被験者数に比べ，極端に少ないので，検定は行っていない。表5の一般高校生の得点平均値と相談室利用者の得点平均値の比較では，相談室利用者は一般高校生のどの下位尺度の値と比較しても低い値であることが明らかである。各下位尺度を比較した図３の棒グラフで明らかなように，一般高校生と相談室利用者の自己斉一性・連続性，対他的同一性の得点の差が大きい。また，相談室利用者の下位尺度間の比較では，一般高校生の場合と同様に，対他的同一性が最も低く，次いで心理社会的自我同一性が低い。

3）事例

相談室利用者の２名について各下位尺度の値を表６に一般高校生の平均値とともに示した。A子は相談室を利用し始めた初期に，B子は１年ほどたった頃に調査した。

A子は体育の時間にたまに欠課する不定期避難型の相談室利用者である。県立高校の受験に失敗したことを理由に親がA子の考えを否定するため，親に存在を認めてもらえないと感じていた。将来の目標も定まらず，何を勉強したいのかもわからず，いつも家族のことに捉われていた。対人関係では，周囲への配慮が足りないためか，クラスメートに避けられている。クラスの中で浮いていると感じるようになった頃からやや情緒的に不安定になってきた。

クラスでの状況が把握出来る担任が中心になって，筆者，養護教諭，保健室に来る教師が受容的に関わることにより自己肯定感を育てる一方で，対人場面におけるA子の問題を取り上げ，構成度の低いＳＳＴ的なワークを行ない，クラスメート以外の生徒との対人関係づくりを試みた。A子の多次元自我同一性の下位尺度は一般高校生に比べ全体的に低いが，そのなかでも特に対自的同一性と心理社会的同一性の値が低い。自分が何をしたいのかよくわからない，将来のこともどうしていいかわからないという気持ちが下位尺度の結果に反映しているといえる。一般高校生や相談室利用者の平均値では，下位尺度のうち対他的同一性の感覚が最も低いのに反し，A子の対他的同一性の感覚は他の因子より高い値を示した。

B子は長期滞在型の相談室利用者で，小さいときからいじめられてきた体験を持つ生徒である。心理的にも不安定で，抑うつ的になることが多く，対人恐怖的心性も強い。定期的な心理面接を行う一方で，心理的に安定できる居場所の提供により，相談室において徐々に同年代と交流できるようになったものの，親しい関係になることはなく，仲間との関係づくりには非常に気を使った生徒である。B子の多次元自我同一性の下位尺度は，全体的に一般生徒に比べかなり低い。その中でも自己斉一性・連続性と対他的同一性は極端に低い。B子はいつも小さい頃のことを「よく思い出せない」といっていた。相談室を利用するようになってしばらくした頃から，昔のことを言葉で表現できることがうれしいというようになった。また，成績で評価されることに拒否感が強いこと，他人を避ける傾向が強いことも，下位尺度の結果に一致する。

表３．一般高校生の多次元自我同一性尺度の年令別得点平均値（ＳＤ）

	N	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	総得点
15歳	166	24.45（7.43）	22.13（6.37）	19.80（5.95）	20.45（4.90）	86.83（18.84）
16歳	442	24.93（7.43）	21.57（6.45）	20.51（6.09）	21.14（5.16）	88.15（19.64）
17歳	268	24.37（7.69）	21.08（6.32）	20.34（5.87）	21.39（5.37）	87.18（20.10）
合計	876	24.67（7.46）	21.53（6.40）	20.32（6.00）	21.09（5.19）	87.60（19.64）

表４．一般高校生の多次元自我同一性尺度の男女別得点平均値（ＳＤ）

	N	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	総得点
男子	651	24.90（7.67）	21.78（6.59）	20.08（6.20）	21.21（5.41）	87.98（20.25）
女子	225	23.99（6.77）	20.78（5.77）	21.02（5.35）	20.74（4.46）	86.52（17.71）
合計	876	24.67（7.46）	21.53（6.40）	20.32（6.00）	21.09（5.19）	87.60（19.64）

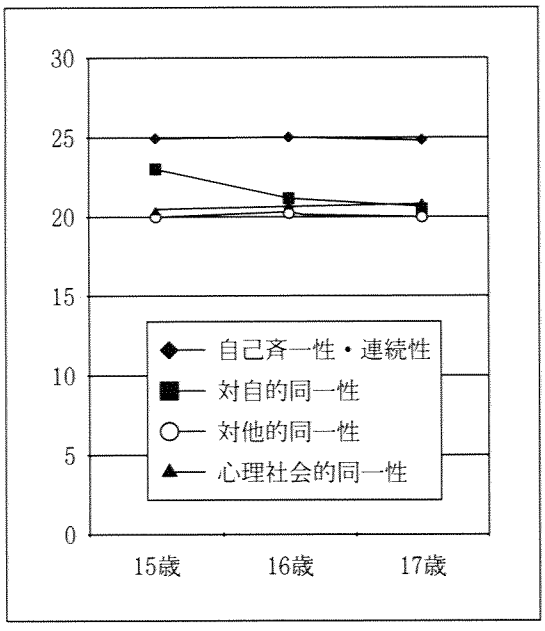

図１．男子生徒の多次元自我同一性
下位尺度の得点平均値の変化

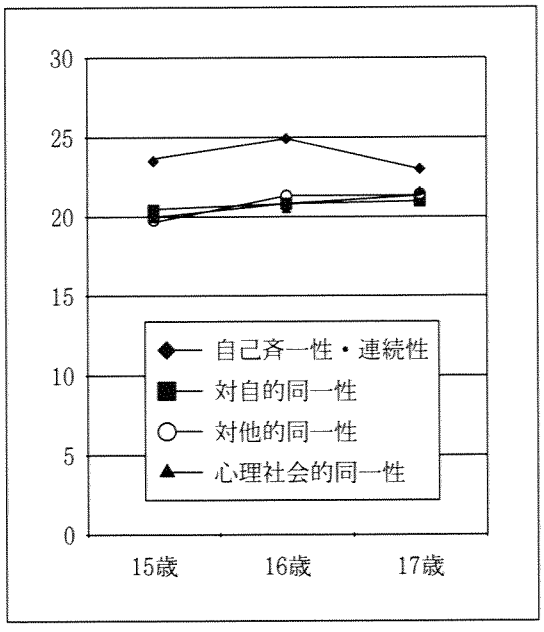

図２．女子生徒の多次元自我同一性
下位尺度の得点平均値の変化

表５．一般高校生と相談利用者の多次元自我同一性尺度の得点平均値（ＳＤ）

	N	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	総得点
一般高校生	876	24.67（7.46）	21.53（6.40）	20.32（6.00）	21.09（5.19）	87.60（19.64）
相談室利用者	19	19.11（6.75）	19.95（5.56）	17.11（4.28）	18.11（4.94）	74.26（16.37）

表６．相談室利用者Ａ子，Ｂ子の多次元自我同一性尺度の得点

	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	総得点
一般高校生	24.67	21.53	20.32	21.09	87.60
A	20	16	20	16	72
B	13	20	10	21	64

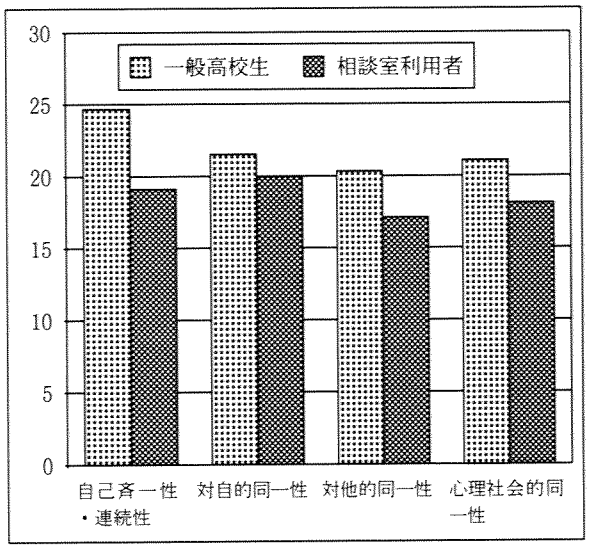

図3．一般高校生と相談室利用者の多次元自我同一性下位尺度の得点平均値

4．考察

1）一般高校生の自我同一性の感覚について

谷[1]によると，従来の自我同一性尺度は，下位概念設定が「同一性　対　同一性拡散」の危機が優勢となる発達段階である青年期における同一性の感覚に焦点化されていないという。そのため，それ以外の発達段階における感覚（基本的信頼感，自律性など）や，同一性の部分徴候（時間的展望の拡散，自意識過剰など）を捉える項目を含むものになっており，純粋に青年期の同一性の感覚を捉えるものになっていないとしている。一方，多次元自我同一性尺度は純粋に青年期における自我同一性の感覚を測定する精度の高い尺度であると述べている。谷の大学生に対する「自我同一性の感覚」の調査では，18歳で81.2，19歳で83.9，20歳で85.6，21歳で89.8，22歳で95.1と年齢が上がるに連れて総得点が段階的に高くなる結果が得られ，多次元自我同一性尺度は発達的にも構成概念的にも信頼性・妥当性の高い自我同一性尺度であると述べている。しかし，本校生徒を対象とした調査では，総得点の平均が15歳で86.98，16歳で88.15，17歳では87.18と16歳より低い値となり，一般高校生における自我同一性の感覚には発達的に大学生のような加齢による顕著な変化はみられず，わずかに15歳と16歳との間に差がみられるのみだった。このように高校生は大学生の場合と異なり，青年期以前の精神発達の影響に加え，青年期に入ってそれまで積み上げてきた内的な枠組みを一旦壊し，新たな枠組みを作り始める年代でもあるので自我同一性形成過程の混乱が予想され，多次元自我同一性尺度の得点にばらつきが生じたものと考えられる。さらに17歳で16歳より得点が低くなっている背景には，多次元自我同一性尺度の調査時期が2年生の2学期の終わりで，受験という大きな課題を実感し始める時期に重なり，なお一層自我の混乱をきたしていることもあると考えられる。下位尺度レベルで見た場合，自己斉一性・連続性の感覚は年齢にかかわらず高得点を示し，早くから育っている感覚のようである。対他的同一性と心理社会的同一性は15歳では低く，発達的に上昇する傾向がみられたが，これは高校生になって社会生活空間が拡大した結果，新たな他者との関わりあいの中で同一性の感覚が育ったものであると考えられる。対自的同一性が15歳で最も高く年齢と共に低くなる傾向は対他的同一性と心理社会的同一性の感覚の発達に伴い，内省が深まり内的枠組みの見直しを迫られた結果ともとれる。このように16～17歳では自我同一性の混乱が見られるものの，今回調査しなかった本校の3年生（17～18歳）が自己あるいは外界を客観的に見ることができるようになり，精神的にも安定してくるという日常的観察と，谷[1]の大学生の調査結果を合わせると，自我同一性の感覚は17歳を境に加齢的に発達していくものと推測される。

永井[10]が対人恐怖的心性について中学生から大学生について調査した結果では，中学生から高校生にかけて対人恐怖的心性が強くなるとし，「他者とのうちとけた行動の困難さ」，「緊張感の高まり」，「視線の問題」などを意味する対人状況における行動・態度の問題が増加し，その結果として，他者からどのように評価をされるのか気にしたり，他者との関係の取り方がわからなくなっている関係的自己意識の問題が自覚され，さらにこのような状況では，「自己の不安定さと劣等感」，「自己統制の弱さ」などの内省的自己意識の問題を強く自覚するようになるというように，三つの次元の問題意識が渾然一体化した状態となっていると考えられると述べている。永井が対人恐怖的心性の尺度とした関係的自己意識は多次元自我同一性尺度の対他的同一性に，内省的自己意識は対自的同一性に対応する概念であり，永井の調査結果と本論の結果は，15～17歳の高校生の年代においては対人恐怖的心性をめぐる葛藤と自我同一性の感覚が同時平行的に湧き上がり，両者が混乱をきたしながらも精神的な発達をとげていくことを示しているものと考えられる。

男女を比較すると女子は男子よりやや得点が低い。また，男子では各下位尺度間に年齢的な変化が見られないのに対し，女子では発達的な変化がみられる。笠原[11]は大人になることに直面した困惑は男女によって様式を異にするとし，最もおおきな男女差は，少女たちが無力感ゆえに成人の女性への変身を拒み，男の子が無力感ゆえに成人の男性たりえないことをひたすら恥じるところにあるだろうとしている。そして男たちは一日も早く成人になりたいと思うと述べている。このような男女の心理的な問題を反映し，男子の方が女子より多次元自我同一性尺度の得点が高くなったということも考えられる。また，菅[12]は 思春期の女性

の特徴として，繊細で豊かな感性をもちつつも思春期の身体に対するこだわりが自己評価の低下につながっているとしている。永井[10]による対人恐怖的心性の調査結果でも，女子においては対人状況における行動・態度の得点が男子より低いにもかかわらず，関係的自己意識や内省的自己意識の得点が男子よりかなり高く，男子より女子の方が心理的にはより対人状況に敏感で，内的な葛藤を強く持つ傾向が現れている。以上のことを考え合わせると，女子の場合，身体的成熟の受容と対人恐怖的心性が密接に関連しあい，成熟に対する葛藤の克服に伴って徐々に自分を受け入れ，自我同一性の感覚も発達的な変化を示すようになるものと考えられる。

一般高校生の調査結果の活用の一つとして，進路指導が考えられる。自我同一性の感覚が平均値よりかなり低い生徒が進路決定ができないという実態もあり，自我同一性の感覚は担任が進路指導する際の生徒理解の資料として活用することも可能である。

2）相談室利用者の自我同一性の感覚について

相談室利用者について「自我同一性の感覚」を調査した結果，相談室利用者の件数が少ないために検定できないものの，一般高校生に比べて相談室利用者は「自我同一性の感覚」が未熟であることが明らかである。相談室利用者の多次元自我同一性尺度の総得点平均値は一般高校生の87.63に比べ，74.26とかなり低い。下位尺度のいずれの因子も低く，特に第3因子の対他的同一性が他の因子より低い結果を示した。事例のB子を含めかつていじめを受けたと述べている生徒においては自己斉一性・連続性の得点がことに低く，過去においていじめを受けていた時期の自分と現在の自分の間の連続性の感覚が希薄であることがうかがえる。また，相談室利用者の多くがクラスメートの視線や成績評価を気にし，また，周囲の人は本当の私をわかっていないなどと他者との関係で悩んでいる[7,8]。つまり，本当の私と他者から見られている私のずれが大きい。このように相談室利用者の「自我同一性の感覚」特に対他的同一性の感覚や心理社会的同一性の感覚が年齢相応に十分育っていないことが，対人関係にも影響を与えていると思われる。永井[10]によると，対人恐怖的心性の自覚が高まるのは，中学生から高校生にかけてであり，その間に自己意識に大きな変化があると報告している。そして大学生になると内的葛藤を強く持つことなく，自分の在り方を受容し，安定しているという。これらの結果は，未熟な自我を抱えつつも，生徒たちが学校生活の中で発達課題を徐々に解決しながら成長していくことによって，自己を受け入れ安定していくということを示し，学校カウンセリングにおける仲間との関係作りの大切さを実感させるものである。

3）事例における自我同一性の感覚について

相談室利用者の多次元自我同一性尺度の測定結果については，個人差が大きく，平均値にはあまり重要な意味づけをする必要はないと思われる。生徒一人一人の抱えている問題や家族的背景などから多面的に生徒を捉えた場合，多次元自我同一性尺度の結果は多くの場合，生徒の発達上の課題と一致していると思われ，どのような自我同一性の感覚に比重を置くかによって，援助の方法や関わり方も変わってくると考える。従って，今後，相談室利用者に対する援助活動において個人の発達課題の問題を考えていく指針になるのではないかと考える。

事例A子の場合は全体的には自我の未熟さを持ちながらも，対他的同一性は一般高校生と同程度であった。これは他者からどう見られているか意に介さない面を反映していると思われる。対人関係の問題をクラスメートのせいにするような外罰的傾向があり，クラスメートに対して攻撃的になることもあった。その意味で，本来の自分自身との不一致感は低かったと思われる。さらに心理社会的同一性の低さに現れているように，自分は何を望んでいるのかわかっていないので深く内省することもなく，悩みも深められることはなかった。しかし，原因は自分にあるとは思っていないが少なくとも“浮いている”という感覚はある。クラスメートとの対立が長期にわたり，他人が悪いだけではなく，自分にも原因があるのだろうかと考え始め，苦しみや悩みが深くなってきた。このようなA子の葛藤は対自的同一性が育つ苦しみであるとも言える。これはA子にとって新たな発達の変化のきざしともとれるもので，相談室としては安易に欠課や欠席を認めるのではなく，浮いている感覚はありながらも長期欠席にならないように支えることではないかと考え，A子の愚痴や不満を聞きながら，長期にわたるクラスメートとの対立に耐えるように支えている。クラスメートとのトラブルの一方で，幸いにもその幼さを受けとめてくれる仲間との出会いもあり，その対人関係の中での成長を期待していこうと考えている。

B子の自我同一性の感覚の得点は非常に低い。小さい時からのいじめにより防衛的になっていることも関係していると思われる。特に自己斉一性・連続性の得点の低さは過去のいやな記憶を封じ込めている結果ではないかと思われる。また，対自的同一性が高く，対他的同一性が低いことから内省的で内向的な性格で，他者から理解されていないし，理解されることを望んでいない生徒であることが推測されるが，現実にB子は深く内省し，自分はどうありたいのかを良く考えている生徒である。また，極端に同輩を受け入れないところがあり，クラスメートや相談室の仲間がどう関わっていいのか困惑させられる生徒である。従って対人関係援助よりも個別的な心理的援助が有効であると思わ

れた。心理社会的同一性が高いのは意外であるが，そもそも参加している社会が「相談室」という限定された空間で，しかもそこでも筆者や養護教諭，担任といった大人との関係しか持とうとしない生徒で，より広い所への参加は望んでいないので，このような結果になったものと思われる。心理面接はB子の内省を一層深め，理解してくれる他者への信頼の第一歩となり，将来の目標に向かって踏み出す決断を迫られたこともあって，教室再適応することができるようになったが，クラスメート全体へはその信頼は及んでいないと思われ，積極的な関係を持とうとしてはいない。

山中[13]は内閉神経症の事例報告において，内閉とは外的には社会的自我の未成熟とされる消極面をもちつつも，内的には退行，しかもそれは次なる新生をもたらすための蛹の時期とでもいうべき積極面を併せ持っていると考えて治療への取り掛かり点とすると述べている。未熟な自我は発達成長という積極性も併せ持つという山中の治療の視点は，多次元自我同一性尺度の結果をいかに捉え，生徒の支援にどのように生かすべきかという点において重要な示唆となると思われる。事例のA子，B子にみられるように2人ともそれぞれの問題を抱え，相談室の援助のもとに悩み，葛藤しながら学校生活を続けているが，その過程において未成熟な自我が実は次なる新生の可能性を示唆していることに他ならないことを教えてくれている。このように発達期の生徒は消極性と積極性を併せ持ちながら，健康的に成長しようとしている存在であることを忘れてはならないと考える。

筆者は対人関係の悩みを持つ高校生に対し，対人関係に焦点を当てて援助する有効性について報告した[7,8]が，その際，生徒一人一人の発達課題を十分理解した上で援助することは重要であると考えられる。そして，対人関係を育てるような成長促進的な援助の一方で，身体的成長に精神的変化が追いつけず，敏感で不安定になりやすく，自我の混乱をきたす年代であることを考慮にいれて，内省促進的な心理的援助も行い，消極的な面も保護しつつ，自我同一性の感覚を育てなおすことが青年期の発達課題を抱えた高校生援助に有効であると思われる。

5．まとめ

青年期の発達課題を抱えた高校生を援助するにあたって，自我同一性の感覚をあらかじめ把握しておくことは重要なことである。そこで，青年期の自我同一性の感覚を測定するために，多次元自我同一性尺度を用いて，一般高校生と相談室利用者のそれを比較検討した。

① 一般高校生においては多次元自我同一性尺度の得点において大学生と違って顕著な発達的変化はみられない。15歳から16・17歳では明らかに得点の増加が見られるのに対し，17歳では16歳より得点が低いなど，自我同一性形成初期の混乱の影響が見られる。また，女子は男子より得点が低いが，年齢とともにその得点が増加し，17歳では下位尺度によっては男子と同等かそれ以上に達している。その原因としては，男女による身体的成長の受容や対人恐怖的心性の違いも考えられる。

② 一般高校生と相談室利用者では明らかに相談室利用者の得点が低く，特に対他的自我同一性の感覚が未成熟で，対人関係の困難さを反映していると思われる。

③ 事例の検討から，多次元自我同一性尺度による自我同一性の感覚は生徒の抱えている発達課題を反映し，援助の実際と一致していることが明らかである。

以上の結果から，自我同一性の感覚は発達期にある高校生の援助活動における重要な指針となると考えられる。特に対他的自我同一性と心理社会的同一性の感覚が未成熟な場合には対人関係の困難さが予想される。実際に対人関係の悩みを訴えて相談室を利用している生徒が多い[2]ことから，対人関係に焦点をあてた援助プランを立てる上で，自我同一性の感覚は有効な情報になると思われ，生徒の発達課題の理解に立った援助を行うことができるものと思われる。また，生徒の発達課題の解決状況を客観的に把握することもできると思われるので，何度か調査することでその有効性も検証することができると考えられる。

＜文献＞

1）谷冬彦（2001）：青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（ＭＥＩＳ）の作成―　教育心理学研究　49，265-273
2）文部科学省（2002）：平成13年度文部科学白書
3）総務庁（2000）：低年齢少年の価値観等に関する調査
4）早坂泰次郎（1994）：＜関係性＞の人間学　川島書店
5）ダン・カイリー（1984）：ピーター・パンシンドローム　祥伝社
6）E．H．エリクソン（1977）：幼児期と社会Ⅰ　みすず書房
7）須藤博子・青木真理（2002）：保健室に付設された相談室の役割　福島大学教育実践研究紀要　43，9-16
8）須藤博子（2003）：対人関係の悩みを持つ高校生に対する心理的・教育的援助について　福島大学大学院教育学研究科修士論文
9）吉田脩二・生徒の心を考える教師の会編（1993）：不登校―その心理と学校の病理―高文研
10）永井撤（1994）：対人恐怖の心理　サイエンス社
11）笠原嘉（1977）：青年期　中公新書
12）菅佐和子（1988）：思春期女性の心理療法　創元社
13）山中康裕（1978）：思春期内閉　In：中井久夫・山中康裕編　思春期の精神病理と治療　岩崎学術出版

（平成15年3月28日受理）

資料　自我同一性の感覚についての調査（谷[1]）

学年（　1年　　2年　　3年　）　　性別（　男子　　女子　）　　年齢（　　歳）

次の1～20までについてそれぞれ現在の自分にあてはまると思われる番号に○をつけてください。

	全くあてはまらない	ほとんどあてはまらない	どちらかというとあてはまらない	どちらともいえない	どちらかというとあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
1．□過去において自分をなくしてしまったように感じる。	1	2	3	4	5	6	7
2．自分が望んでいることがはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
3．□自分のまわりの人々は，本当の私をわかっていないと思う。	1	2	3	4	5	6	7
4．現実の社会の中で，自分らしい生き方ができると思う。	1	2	3	4	5	6	7
5．□過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
6．自分がどうなりたいのかはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
7．自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。	1	2	3	4	5	6	7
8．現実の社会の中で，自分らしい生活が送れる自信がある。	1	2	3	4	5	6	7
9．□いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
10．自分のするべきことがはっきりしている。	1	2	3	4	5	6	7
11．□人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。	1	2	3	4	5	6	7
12．現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	1	2	3	4	5	6	7
13．□今のままでは次第に自分を失っていってしまうような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
14．□自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。	1	2	3	4	5	6	7
15．□本当の自分は人には理解されないだろう。	1	2	3	4	5	6	7
16．□自分らしく生きてゆくことは，現実の社会の中では難しいだろうと思う。	1	2	3	4	5	6	7
17．□「自分がない」と感じることがある。	1	2	3	4	5	6	7
18．□自分が何をのぞんでいるのかわからなくなることがある。	1	2	3	4	5	6	7
19．□人前での自分は，本当の自分ではないような気がする。	1	2	3	4	5	6	7
20．□自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。	1	2	3	4	5	6	7

（□印がついている項目は逆転項目を示す）